



1 子どもの教育 霊学の観点からの子どもの教育他

シュタイナー自身による「シュタイナー教育入門」。わかりやすくその真髄に迫る絶好の基本書。全面新訳。訳者による適切な解説「生きる子ども」「子どもの教育」を付す。

2 内面への旅★ 感覚の世界から霊の世界へ オカルト的な読み方と書き方他

心の深層の秘密を解明するシュタイナーの代表的な講義録を集めた。新たな「自分との出会い」のための書。

3 照応する宇宙★ マクロコスモスとミクロコスモス他

古代秘教におけるアストラル体の体験、エーテル体の体験を具体的にたどり、現代人の意識に引きあわせ「宇宙への旅」を詳述する。

4 神々との出会い★ キリシアの神話と秘儀他

現代を新しいルネサンス時代と見、キリシア神話の神々、特にディオニソスの現代的意味を考究し、精神史の謎を解くスリリングな講義。

5 イエスを語る★ マタイ福音書他

「マタイ福音書」をテキストにして、イエスキリストの系譜をツァァン・クストロウにまでさかのぼりユダヤ民族の本質に迫る。

6 歴史を生きたる★ 人智学から見た世界史Ⅰ・Ⅱ

古代・中世・近世の歴史の現実を、代表的な人物たちをつま動かしている衝動の中に見ようとするシュタイナーの世界史概論。

7 芸術の贈りもの★ 芸術論集

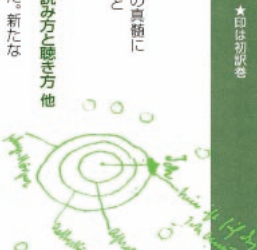
20世紀初頭の時代精神から新しい芸術の方向を切り開く、とする美学者シュタイナー。カティンスキーからヨーゼフ・ボイスまでの芸術行跡の原典。

■ 二十一世紀の霊知をさぐるために

荒俣宏

一九七〇年代に「神秘学」という新鮮な用語が流布した。その中心にいたのがルドルフ・シュタイナーであった。私自身にとっても、シュタイナーとの出会いは、それまで正体の知れぬ領域だったオカルトに、知と哲学の根を打ち込むための大きなきっかけとなった。オカルトといえば、当時は魔術や超能力を意味し、明らかに闇のフィールドであったのに、その魔術的思想が昼の光の中にあっても学術的な哲学となりうることを、私たちは驚きの眼で目撃したのだった。

しかし、シュタイナーの思想はきわめて多岐にわたっており、その全貌を紹介するには、科学・美学・哲学・倫理・教育・医学・心理学などに精通した法廷が必要であった。そういう奇蹟的な先達が一九七〇年代に日本にも登場したのである。記者高橋雅氏は、氏が慶應大学で教鞭をとられていた時代に、私は学生として教えを受けた。ドイツ語のアキストが、いきなり「エリウスの神智学」だったことに驚き、語学そのもので高橋先生の神秘学講義に熱中したのである。このたびのシュタイナー・コレクションが、霊の問題を忘れかけた二十一世紀に向けて、ふたたび新鮮な神智と人智を開示してくれることを確信する。



■ 一本の柱

志村ふくみ

はじめてシュタイナーを学んだ頃のノートが出て来て、ほぼ十数年近く、毎回高橋雅先生の講義のノートをとるのが、とても楽しかったことを思い出す。まるで女学生のようにいそいそとかけたものだ。

人智学はあまりに悠遠、壮大で私に語れるものではないが、今年を経て唐突にも思い至ったことは、若い時には決してなかつた底深い、熱い思いが胸のどこかに絶えず湧き出していることだ。身にくいこむように、心の中に一本の柱が立っている。

「はじめにカオス混沌」があります。そこに意味があらわれません。意図があらわれ動かなければ、有意義な空間にならないのです。それは芸術的意図といえます。」

はじめのノートに「そう書いてある。黒板に円形を描きながら宇宙進化論の講義を伺った時、私の胸はどんなに高鳴ったろう。はじめて聞く宇宙のはじまり、そこへ神々の流出があったと。」

香り高い神秘の世界のはじまりだった。